

ジンポー語文法概要および民話資料 — 兄弟が湖を動かした話

倉部 慶太

1 はじめに

本稿の目的はジンポー語の文法概要およびテキストを提示することにある。本稿で提示するデータは筆者が 2009 年から 2011 年にかけて行ったミャンマー連邦共和国における 5 回のフィールドワークの成果に基づいている。本稿では、2 節でジンポー語の概況に関して述べ、3 節以降で文法スケッチを行う。そして、最後の 10 節でテキストを提示する。

2 ジンポー語とは

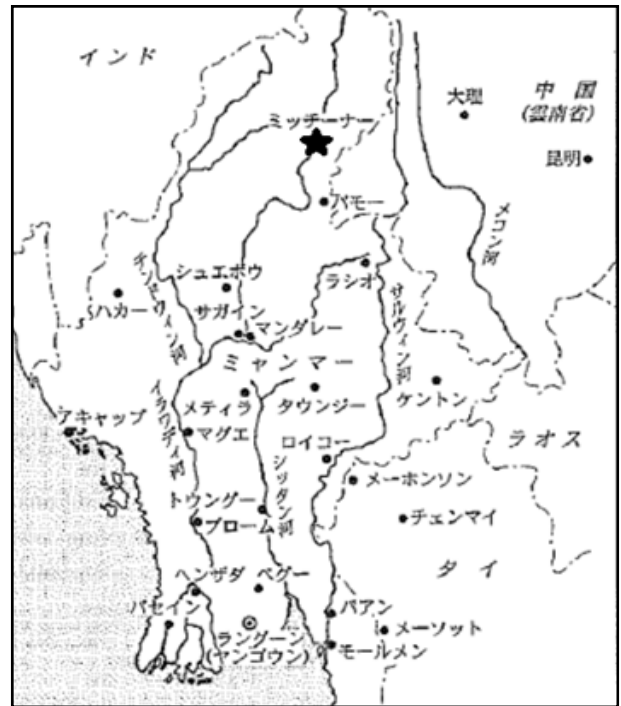
2.1 地域・系統

ジンポー語はミャンマー連邦共和国 (ビルマ) 北部を中心に、東は中国西南部雲南省徳宏傣族景頗族自治州、西は東北インドアッサム州、アルナーチャル・プラデーシュ州にかけ、国境を越えて分布するチベット・ビルマ系言語である。この言語が話されるミャンマー北部の主要な地域には、カチン州のミッチーナ、バモ (マンモ)、ダナイ、シャン州北部のナムカム、クックアイ、ラーショー (ラシオ) などがある。筆者の主な調査地はミャンマー北部カチン州ミッチーナ市である (地図の★印)。

系統的にはこの言語はシナ・チベット語族 (Sino-Tibetan)、チベット・ビルマ語派 (Tibeto-Burman) に属する。

民族的には、ジンポー人は、ロンウオー (マル)、ラチッ (ラシ)、ツアイワ (アツイ) などの民族と共に「カチン」と呼ばれる文化的集団の成員を成す。ジンポー語はロンウオー語、ラチッ語、ツアイワ語とはチベット・ビルマ語派内で必ずしも系統的に近い関係にあるとはいえないが、カチン民族の中でジンポー語はリングフランカとして通用しており、通常、「カチン語」というとジンポー語を指す。

ミャンマーにおけるジンポー人の人口は 630,000 程度とされる (以下の表を参照)。この人口の多くがジンポー語を使用しているものと推測される。また、上述の通り、カチン民族



地図 1 : ミャンマー (西田 2000)

に属する他の民族もジンポー語を使用することが多いため、これらの人口も含めると、ジンポー語の話者数はさらに増加するものと考えられる。

表 1：カチン民族の推定人口 1992 (Bradley 1996)

Group	Myanmar	China	India	Thailand	Total
Jinghpaw	630,000	15,000	2,000	500	650,000
Atsi	80,000	90,000		20	170,000
Maru	90,000	10,000		100	100,000
Ngochang	10,000	30,000		5	40,000
Lashi	25,000	5,000		5	30,000
Pola		2,000			2,000

2.2 類型的特徴

音韻面に関しては、6つの母音と24の子音を持つ。母音の長短の対立および二重母音は音韻的には認められない。音節声調を持ち、4つの声調が認められるが、そのうちのひとつは二次的な性格を示す。また、閉鎖音末子音を持つ閉音節においては2つの声調のみが対立する。音節構造は比較的単純であり、基本的に音節頭に現れうる子音結合は最大2つまでである。また、音節末に現れうる子音の数は9個と限られており、音節末に子音結合は現れない。派生、複合、借用語を除く語の大部分は一音節もしくは二音節から成り、三音節以上の語は異質であるといえる。二音節語の大部分はその第一音節がCəの形式を取る副音節であり、この位置に副音節以外の形式が来ることは比較的まれであるといえる。

形態面については、この言語の形態論は分析的・膠着的であるといえる。最も一般的な語形成法は複合であり、複合語が生産的に形成される。複合語の中には同一要素の繰り返しを含む4つの形態素から成る複合語（‘elaborate expressions’）も観察される。複合の他に重複も一般的な語形成法である。派生形態論は比較的単純であり生産的な接辞の数は少ない。接辞は接頭辞が最も多いが少数の接尾辞も認められる。接中辞は見られない。接頭辞の中には固有の意味を持たず一音節語を二音節語に膨張させるためだけに用いられる接頭辞も観察される。

統語面に関しては、基本的に従属部標示型 (dependant-marking) の言語であり、文法関係は主に名詞句に後接される格標識によって示される。格標示のパターンは主格・対格型 (S/A vs. O) である。所有構造においては従属部名詞に属格が付加される。

語順に関しては、動詞末尾型 (verb-final) の基本語順を持ち、動詞 (述語) は必ず節末に置かれる。節中の名詞句の順序は比較的自由であるが、無標の文脈においては他動詞節の主語は目的語に先行するパターンを示す。従属部と主要部の順序は多様な様相を呈する。すなわち、所有者、関係節、副詞節は主要部に先行するパターンを示し、数詞、類別詞は主要部に後続するパターンを見せる。また、指示詞、形容詞的要素は主要部に先行することも後続

することもありうる。助動詞的要素の中にも主動詞の前後どちらにも現れうる形式が観察される。副詞は基本的に動詞の直前に置かれ、特にアスペクト的意味を表す副詞は必ず動詞の直前に置かれなければならない。したがって、同一節中に複数の副詞が生起する場合、程度・様態副詞はアスペクト副詞よりも左側に出現することになる。

名詞の下位類である閉じたクラスには人称代名詞、指示詞、数詞、疑問代名詞、場所名詞などが認められる。普通名詞・人称代名詞ともに文法性を持たず、普通名詞は数も義務的なカテゴリではない。類別詞の数は少なく、基本的に数詞が名詞を直接的に修飾するパターンを見せる。名詞句は文脈から明らかである場合、しばしば省略される。

最小の動詞複合 (Verbal Complex) は [動詞 + TAM標識] という構造を持つ。この動詞複合は動詞連続や助動詞によって拡張され、多様な意味を獲得する。文法カテゴリとしてのテンスは持たず、アスペクト・ムード卓立型言語であるといえる。アスペクトおよびムードは TAM 標識によって義務的に示される。アスペクトは TELIC vs. ATELIC の二項対立を成す。多様な文末助詞を持ち、モダリティは文末助詞によっても表される。

2.3 地域的特徴

ジンポー語が分布するミャンマー北部は、チベット・ビルマ諸語の観点からはそれらの言語が話される中心地に相当する。また、シナ文化圏 (Sinosphere) とインド文化圏 (Indosphere) という観点からはその緩衝地帯 (buffer zone) に当たると考えられる。そして、東南アジア大陸部という観点からはその周辺として位置付けられる。本小節では、この第三の観点から見たジンポー語の地域的言語特徴に関して若干概観する。

東南アジア大陸部 (Mainland Southeast Asia) ではオーストロアジア語族、シナ・チベット語族、タイ・カダイ語族、フモン・ミエン (ミャオ・ヤオ) 語族、オーストロネシア語族という5つの語族に属する一千以上の言語が話される。これらの言語は高度な言語多様性を呈する一方、長期に渡る言語接触の結果、音韻・形態・統語・語彙の全領域に渡って、系統を超えた共通の言語特徴を持つに至ったとされる。

ジンポー語にも東南アジア大陸部諸語が有するとされる言語特徴が多数認められる。例えば、音韻面に関しては、声調、副音節、音節末子音の制限などが、形態面では、複合・重複の多用、単純な派生形態論、‘elaborate expressions’ などが、統語面では、類別詞、動詞連続、アスペクト卓立 (aspect prominent)、多様な文末助詞 (sentence-final particles)、文の名詞化 (sentential nominalization)、動詞のサブタイプとしての形容詞などが挙げられる。

この地域の言語は語彙面でも系統を超えた共通性を見せる (‘Southeast Asia semantic area’)。例えば、「洗う」「運ぶ」「切る」「乾燥させる」「引き抜く」などの意味を表す動詞の細分化、「炊いた米」と「炊いていない米」の区別、「年上の兄弟姉妹」と「年下の兄弟姉妹」の区別などが広く見られるとされる。また、この地域の言語では 3人称単数代名詞は性の対立を持たないことが多いという特徴も指摘されている (‘areal lexicon’, Matisoff 1978, 2003, 2004)。ジンポー語に見られる例を次表に掲げておく。

表 1 : ジンポー語に見られる ‘areal lexicon’ の例

意味	ジンポー語
‘WASH’	khɾùt 「(服を) を洗う」, myít 「(顔を) 洗う」, gə̀sìn 「(手や皿を) 洗う」
‘CARRY’	gun 「手や背中で運ぶ」, phay 「肩に担いで運ぶ」, laŋ 「手で運ぶ」
‘CUT’	rèp 「(鋏で) 切る」, gə̀thàm 「(刀で) 切る」, dī? 「(ロープを) 切る」, phyá? 「(肉を) 切る」
‘RICE’	šàt 「炊いた米」, ngu 「脱穀米」, mam 「稲, 脱穀前の米」
‘SIBLING’	gə̀phù 「兄」, gə̀na 「姉」, gə̀naw 「弟, 妹」

また、同様の構成要素から成る複合語も系統を超えて観察される (‘areal calques’)。次のような複合語は東南アジア大陸部諸語に広く見られる例とされている (Matisoff 1978, 2004) (なお、主要部と修飾部の順序は言語ごとに異なる。表中網掛け部分はジンポー語で該当する例が見られない例である。PTB はチベット・ビルマ祖語を指す)。

表 2 : ジンポー語における ‘areal calques’ の例

意味	areal calques	ジンポー語
‘flame’	‘fire’ + ‘tongue’	wàn 「火」 + šìŋlèt 「舌」
‘dental caries’	‘tooth’ + ‘insect’	wa 「歯」 + ?utuŋ 「虫」
‘thumbs’	‘finger/hand’ + ‘mother/female’	(1) yùŋ 「指」 + nù 「母」 > yùŋnù (2) lə- (< PTB *lak 「手」) + nù 「母」 > lənu
‘train’	‘fire’ + ‘car’	wàn 「火」 + lèŋ 「輪」
‘freckle/mole’	‘fly’ + ‘shit’	cf. jì?nù 「蠅」 + dī 「卵」
‘meteor’	‘star’ + ‘shit’	šəgan 「星」 + pyen 「飛ぶ」
‘epilepsy’	‘pig’ + ‘crazy/illness’	mà.mu (< シャン語)
‘knee’	‘leg’ + ‘joint’	lə- (< PTB *lak) + phùt 「跪く」
‘tear’	‘eye’ + ‘water’	myì? 「目」 + pruy 「?」
‘anklebone’	‘eye’ + X (‘foot’, ‘cow’, ‘elephant’, ‘fish’)	?

さらに、「米」+「食べる」>「食べる」、「道」+「歩く」>「歩く」のような、名詞 + 動詞全体と動詞が意味的に等価であり、名詞要素がリダントであるようなコロケーションも東南アジア大陸部諸語においてしばしば見られる表現であるとされる (Matisoff 2003)。

表 3 : ジンポー語に見られる ‘areal collocations’ の例

意味	ジンポー語	意味	ジンポー語
食べる	šàt 「飯」 + šá 「食べる」	生きる	sàk 「命」 + khruŋ 「生きる」
歩く	lam 「道」 + khom 「歩く」	空腹だ	kan 「腹」 + kóʔsi 「空腹だ」
話す	gà 「言葉」 + šəga 「話す」	喉が渇く	khàʔ 「水」 + gəràʔ 「喉が乾く」
学ぶ	làyka 「本」 + šərin 「学ぶ」	泳ぐ	khàʔ 「水」 + phùnyòt 「泳ぐ」

東南アジア大陸部諸語では同様のパターンを示す文法化が系統を超えてしばしば観察されることも知られている (‘grammaticalization area’, Heine & Kuteva 2005)。次表のような文法化は東南アジア大陸部諸語に広く見られる例とされる (Matisoff 1991a, 2004, Enfield 2001):

表 4 : ジンポー語に見られる ‘areal grammaticalization’ の例

areal grammaticalization	ジンポー語
‘to get’ ---> ‘MANAGE TO, MUST, BE ABLE’	lù 「得る」 ---> 「できる」
‘to give’ ---> ‘BENEFACTIVE, CAUSATIVE’	jòʔ 「与える」 ---> ‘BENEFACTIVE, CAUSATIVE’
‘to stay, be at, dwell’ ---> ‘PROGRESSIVE’	ŋà 「いる」 ---> ‘PROGRESSIVE’
‘to say’ ---> ‘COMPLEMENTIZER’	ŋú, ŋa 「言う」 ---> ‘COMPLEMENTIZER’
‘to surpass, exceed’ ---> ‘MORE’	graw 「超える」 ---> ‘MORE’
‘MOTHER/CHILD’ ---> ‘AUGMENTATIVE/DIMINUTIVE’	nû (or gə̀nù) 「母」 (cf. làyka 「文字」 + gə̀nù > 「字母」, yùŋ 「指」 + nû > yùŋnù 「親指」) gə̀šà 「子供」 ---> ‘DIMINUTIVE’

ジンポー語の借用語の大部分はビルマ語、シャン語、漢語の借用である。中国側のジンポー語には漢語からの借用語が多く見られ、ビルマ語からの借用語は少数のようである (戴・徐 1983)。一方、ビルマ側のジンポー語にはビルマ語からの借用語が数多く見られ、漢語からの借用語は極少数にすぎない。シャン語の借用語はどちらの方言にも多数見られる。

ビルマ語借用語には rún 「事務所」 (< yóun), jòŋ 「学校」 (< cáun), seŋ 「店」 (< sáin), bàt 「週」 (< paʔ), jàk 「機械」 (< seʔ), myúʔ 「町」 (< myô) などが見られる。

漢語借用語としては zèn 「切る」 (< jiǎn), zèndàw 「鋏」 (< jiǎndāo), khoyzè 「割り箸」 (< kùaiizi), khinj 「千」 (< qiān), làwbàn 「ボス」 (< làobǎn), janmaw 「冠」 (< guānmiǎn) などがある。

シャン語借用語としては次表のような例がある。

表 5 : ジンポー語におけるシャン語由来の借用語

bənàw 「魚醬」 (< paa ¹ law ¹)	bəlúk 「鰻」 (< paa ¹ luk ⁴)
cò 「スプーン」 (< tsɔ ⁵)	dùsàt 「動物」 (< s ^h at ⁴)
gát 「市場」 (< kaat ²)	gòŋ 「紡績機」 (< koŋ ⁴)
joŋ 「傘」 (< tsɔŋ ³)	kók 「瓶」 (< k ^h ɔk ⁴)
khaw 「田」 (< k ^h aw ³)	khyèpdin 「靴」 (< tin ¹)
kho.khám 「王」 (< ho ¹ k ^h am ⁴)	mà.mu 「癩癩」 (< maa ³ mu ¹)
məgo 「梨」 (< maak ² kɔ ³)	məkók 「林檎」 (< maak ² kɔk ²)
məʔûn 「ココヤシ」 (< maak ² ʔun ¹)	mələŋ 「ジャックフルーツ」 (< maak ² laaŋ ⁴)
màkcòk 「蜜柑」 (< maak ² tsɔk ⁴)	mákphyíkpòm 「胡椒」 (< maak ² p ^h it ⁵ pòm ³)
màysàk 「チーク」 (< maj ⁵ s ^h ak ⁴)	múŋ 「国」 (< mɔŋ ⁴)
mo 「鉾山」 (< mɔ ⁴)	mo 「壺」 (< mɔ ³)
mùn 「万」 (< muun ²)	praŋtáy 「兎」 (< paan ¹ taaj ⁴)
phəjèt 「タオル」 (< p ^h aa ³ tset ⁵)	phəro 「ニンニク」 (< p ^h ak ⁴ lo ⁴)
sèn 「十万」 (< s ^h en ¹)	sún 「庭」 (< s ^h on ¹)
tawba 「へちま」 (< taw ³)	taw 「亀」 (< taw ²)

3 音韻

3.1 分節音

ジンポー語には 24 の子音音素と 6 つの母音音素がある。

表 6 : 子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	p, ph, b	t, th, d	c[tʃ], j[ç]	k, kh, g	ʔ
摩擦音		ts[s], s[s ^h], z	ʃ[ʃ]		h
鼻音	m	n		ŋ	
流音		l, r			
半母音	w		y		

表 7 : 母音音素

	前舌	中舌	後舌
狭	i		u
中	e	ə	o
広		a	

筆者のデータの中では、子音 /h/ は /kəhám/ [kəhám] 「欠伸する」の一語にしか見られず、極めて副次的な性格を有する。この語は方言によっては [kək^hám] とも発音されるため、この /h/ は /kh/ に由来することが分かる。母音音素には /i, e, a, o, u, ə/ がある。母音 /ə/ は閉音節や単語末には現れず、副音節 (minor syllable) にのみ現れる点で特殊な母音である (後述)。

3.2 声調

音節声調を持ち、開音節において、高平調 (High-level)、中平調 (Mid-level)、低下降調 (Low-falling)、高下降調 (High-falling) の 4 つの声調を持つ。ただし、閉鎖音末子音を持つ閉音節においては、High と Low の 2 声調のみが対立する。本稿ではジンポー語の 4 つの声調をそれぞれ /má/ [55], /ma/ [33], /mà/ [31], /mâ/ [51] と表す: yó 「計画する」, yo 「浮く」, yò 「弱まる」, yô 「よ、ね」 (cf. gát 「市場」, gât 「走る」)。

なお、4 つの声調の中で高下降調の割合は極度に低い。声調の割合に見られるこの非対称性は、東南アジア大陸部の声調言語によく見られる性質であるが、この理由は声調発生論 (tonogenesis) の観点から説明できるケースが多い。ジンポー語の場合、高下降調を持つ語は基本的には次の 2 つがある。1) 親族名称・間投詞・文末助詞 2) 低下降調から形態音韻論のプロセスにより発生した場合。後者は特定の接頭辞が付加されることにより高下降調が出現するという例である (例: tsòm 「美しい」 > ?ə-tsôm 「よく、十分に」)。このように高下降調は二次的に発生したため、この声調の割合は低い。とはいうものの、上記したとおりミニマルペアも存在するため、高下降調も独立の声調素 (toneme) として認める必要がある。

3.3 音節構造

基本的な音節構造は次のように図式化することができる。

$$\sigma = C_1(C_2)V(C_3)/(T)$$

図 1 : 音節構造

C₂ のスロットには /r, y/ が、C₃ のスロットには /p, t, k, ʔ, m, n, ŋ, w, y/ が入る。また、子音結合 C₁C₂ には /pr, kr, phr, khr, br, gr, py, ky, phy, khy, by, gy, my, ny/ が見られる。子音結合はソノリティーの低いものから高いものへという順に配列されるといえる。

表 8 : 音節の種類

音節の種類	例
開音節	jà 「金」, jé 「裂く」, jí 「小便する」, jó 「染める」, jú 「棘」
ソノラント末子音	mam 「稲」, man 「表」, maŋ 「死体」, maw 「驚く」, may 「よい」
閉鎖音末子音	jàp 「辛い」, jàt 「加える」, jàk 「機械」, jàʔ 「硬い」
成節鼻音	npúʔ [m.púʔ] 「下」, nten [ŋ.ten] 「唇」, ngúp [ŋ.gúp] 「口」

ソノラント末子音には /m, n, ŋ, w, y/ がある。また、閉鎖音末子音には /p, t, k, ʔ/ があるが、このうち末子音 -k の頻度は低い。上表のとおり、成節鼻音から成る音節も観察されるがこれは二音節語の第一音節にのみ出現する点で特殊である (後述)。

3.4 語構造

ジンポー語の語構造には次表の 4 タイプが存在するとされる (Matisoff 1999)。この言語では三音節語は極めてまれであり、筆者のデータ中では、三音節語の例は pəlámǎʔ 「蝶」くらいしか見られない。この例は共時的には単一の語であるにしても、通時的には分析可能であると考えられる (cf. ビルマ文語 phalam 「蛾」)。以下では、4 タイプの語構造についてそれぞれ記述していく。

表 9 : 語構造

語構造のタイプ	語構造
1) ‘monosyllabic words’	C(C)V(C)
2) ‘sesquisyllabic words’	Cə-C(C)V(C)
3) ‘prenasalized words’	N-C(C)V(C)
4) ‘disyllabic words’	CV(C)-C(C)V(C)

3.4.1 ‘Monosyllabic words’

一音節から成る語であり、動詞の中で最も多く、名詞中 35.6% もこのタイプである (後述)。

表 10 : ジンポー語における ‘monosyllabic words’

sá 「食べる」	lùʔ 「飲む」	sa 「行く、来る」	yúp 「寝る」
myìʔ 「目」	na 「耳」	say 「血」	wàʔ 「豚」

3.4.2 ‘Sesquisyllabic words’

副音節 (Cə) + 主音節の構造を持つ二音節語は ‘sesquisyllabic words’ と呼ばれる (Matisoff 1973, 1999)。Matisoff (1999) はチベット・ビルマ語派諸言語を声調などのプロソディックな特徴および語構造の観点から類型化し、ジンポー語が sesquisyllabic words を豊富に有することから、この言語を ‘sesquisyllabic tone language’ として分類している。

3.4.2.1 副音節

二音節語の大部分 (基礎語彙中約 74%) は副音節をその第一音節に持つ。ジンポー語の副音節の特徴は次のように一般化することができる。副音節は 1) 母音が /ə/ である、2) 声調を持たない、3) 強勢を持たない、4) 開音節である (cf. *kən, *pət)、5) 単語末には現れない

(cf. *kə#, *gumpə#)、6) 子音結合を持たない (cf. *krə, *pyə)。これらの特徴の多くは副音節を持つ東南アジア大陸部諸語の副音節にも共通に見られる特徴であるとされる (Mazaudon 1977)。

副音節の形式は限定的であり、頻度的にも大きな偏りが見られる。Hanson (1906) 収録の副音節を持つ語彙 (3,024 語) を分析したところ、副音節の形式およびその頻度に関して次表の結果が得られた (表中の数字は語彙数、*はその形式が存在しないことを示す)。

表 11 : 副音節の形式およびその頻度 (Hanson 1906)

	p-	ph-	b-	t-	th-	d-	c-	š-	j-	k-	kh-	g-
-ə	53	24	17	4	8	55	95	383	97	23	85	588
%	1.8	0.8	0.6	0.1	0.3	1.8	3.1	12.7	3.2	0.8	2.8	19.4
	ʔ-	ts-	s-	z-	h-	m-	n-	ŋ-	l-	r-	w-	y-
-ə	534	13	124	*	*	511	*	*	408	*	*	2
%	17.7	0.4	4.1			16.9			13.5			0.1

この表より、次の2点が言える。1) 副音節の形式は、頻度の高い順に gə, ʔə, mə (511-588 語; 16.9-19.4%) > lə, šə (383-408 語; 12.7-13.5%) > sə, jə, cə, khə (85-124 語; 2.8-4.1%) > də, pə (55-53 語; 1.8%) > phə, kə, bə (17-24; 0.6-0.8%) > tsə, thə, tə, yə (2-13 語; 0.1-0.4%) である。2) *zə, *hə, *nə, *ŋə, *rə, *wə のような副音節は存在しない。

副音節は形式が限定的であるが、少なくとも共時的には固有の意味を持たない場合がほとんどである。例えば、次のような語の lə に共通の意味を見出すことは困難である: ləpran 「間」、lədî 「鼻」、lədò? 「時期」、ləyan 「原野」、ləbáw 「歴史」、ləthà? 「上部」、ləgòn 「暇な」、ləjàn 「準備する」。

ただし、いくつかの例に関しては通時的な説明が可能である。例えば、手に関する語の多くは lə という第一音節を持つ: lətá? 「手」、ləphàn 「掌」、ləyuj 「指」、ləmyin 「爪」、ləphà? 「肩」、ləkhôn 「腕輪」、lədón 「手を伸ばす」等。この lə は通時的にはチベット・ビルマ祖語 (PTB) *lak 「手」に遡る。すなわち、ləkhôn 「腕輪」という語は本来 *lak 「手」+ khon 「嵌める」のような N+V 複合語の第一音節が弱化して成立したものであると考えることができる。

このように、弱化が一音節 + 一音節から成る複合語に起こると前部要素の本来の意味は極めて不透明 (opaque) なものになる。この種の現象は東南アジア大陸部諸語に広く認められ、Matisoff (1989) は 'prefixization of compound constituents' と呼んでいる。同様の例を次表に挙げる。

表 12 : ジンポー語に見られる 'prefixization of compound constituents'

例	起源
šəday 「臍」	< PTB *sya 「肉, 動物」
šəbí 「頬」	
šəro 「虎」	< *(lə)pu 「蛇」 + rən 「長い」
səgû 「羊」	
bərən 「龍」	

3.4.2.2 ‘Sesquisyllabization’

ジンポー語は本来的な *sesquisyllabic words* を豊富に有するのみならず、一音節語や二音節語も派生や弱化によって *sesquisyllabic words* へと移行する現象が観察される。前者の例としては、一音節語に ʔə- という無意味接頭辞を付加して一音節語を *sesquisyllabic words* へと膨張させる例が見られる。この接頭辞は固有の意味を持たず、音節数を増加させるためだけに用いられる。なお、この接頭辞が付加される語は語彙的に指定されており、どの語にでも付加できるというわけではない。

表 13 : 無意味接頭辞 ʔə-

cen 「半分」 > ʔə-cen	gà 「語」 > ʔə-gà	gá 「地」 > ʔə-gá
jà 「金」 > ʔə-jà	kòp 「貝」 > ʔə-kòp	tèn 「時」 > ʔə-tèn
kyú 「利益」 > ʔə-kyú	làp 「葉」 > ʔə-làp	la 「男」 > ʔə-la
mú 「仕事」 > ʔə-mú	mun 「髪」 > ʔə-mun	maŋ 「死体」 > ʔə-maŋ
myiʔ 「目」 > ʔə-myìʔ	myiŋ 「名」 > ʔə-myìŋ	myú 「種類」 > ʔə-myú
nàm 「森」 > ʔə-nàm	này 「ヤム」 > ʔə-này	num 「女」 > ʔə-num
núʔ 「脳」 > ʔə-núʔ	pràt 「時期」 > ʔə-pràt	phiʔ 「皮」 > ʔə-phiʔ
rì 「糸」 > ʔə-rì	rì 「槍」 > ʔə-rì	rù 「根」 > ʔə-rù
ráy 「物」 > ʔə-ráy	sày 「血」 > ʔə-sày	šàn 「肉」 > ʔə-šàn
šàt 「米」 > ʔə-šàt	sàk 「年齢」 > ʔə-sàk	sáw 「油」 > ʔə-sáw
tàw 「壺」 > ʔə-tàw	tsàm 「力」 > ʔə-tsàm	tsì 「菓」 > ʔə-tsì
tsiŋ 「草」 > ʔə-tsiŋ	tsíp 「巢」 > ʔə-tsip	wa 「齒」 > ʔə-wa
wàn 「火」 > ʔə-wàn	wan 「皿」 > ʔə-wan	

後者の例としては、本来 ‘full’ な第一音節を持つ二音節語が第一音節の弱化によって *sesquisyllabic words* へ移行する現象が挙げられる。この変化は通時的にも共時的にも観察される。通時的変化の例は先述したが、*lak 「手」 + khon 「嵌める」 ---> ləkhon 「腕輪」のような例である。この種の例では共時的には *sesquisyllabic words* のみが観察されることになる。

一方、この弱化プロセスは共時的にも観察される。例えば、gìnsúp ~ gəsúp 「遊ぶ」、šìŋgrùp ~ šəgrùp 「囲む」、mìwà ~ məwà 「漢族」、wùloy ~ wəloy 「水牛」のような例である。後者の発音は早い発話においてしばしば観察される形式である。この種の例では、二音節語と *sesquisyllabic words* が共時的に併存している状態にある。これらの二音節語も最終的には完全な *sesquisyllabic words* へと移行する可能性がある。この弱化プロセスが一音節 + 一音節の複合語に生じた場合、前部要素の本来の意味は極めて不明瞭になる。これは共時態に見られる ‘prefixization of compound constituents’ の例といえよう。例えば、sùtdèk ~ sədèk 「箱」

(cf. sùt 「富」, dèk 「箱」), gùpcóp ~ gəcóp 「帽子」 (cf. gùp 「被る」, cóp 「被る」), lùydùy sì ~ lə̀dùy sì 「蜜柑」 (cf. lùy 「多汁の」, dùy 「甘い」, sì 「実」) などの例が観察される。

上記の交替は多くの話者に観察される例であるが、ある種の例は一部の話者にのみ見られる。これには次の 2 通りのパターンがある。1) 大部分の話者は弱化形のみを用いるが一部の話者は非弱化形と弱化形の両方を用いる。例えば、「カメレオン」を表す語に関して、大部分の話者は sənyên という形式のみを用いるが、一部の話者 (特に、高年齢層) は šĩnyên という形式をも用いる。同様の例として sinlí と səlí 「遺産」, sinlu と səlu 「水蒸気」, sùmmýít と səmýít 「針」, gĩnlen と gəlen 「手渡す」のような例がある。2) 大部分の話者が非弱化形を用いるが、一部の話者は弱化形をも用いる。例えば、「居間」を表す語に関して、大部分の話者は dódàp (cf. dó 「供する」, dàp 「部屋」) という非弱化形のみを用いるが、一部の話者は dədàp という弱化形をも用いる。以上のバリエーションに関しては次ような解釈が許されると思われる。すなわち、1) のパターンを示す語は弱化プロセスの末期にある語であり、一方、2) のパターンを示す語は弱化プロセスの初期的状態にあるものと考えられる。

以上、一音節語および二音節語の sesquisyllabic words への移行を見たが、さらに、この言語では ‘full’ な第一音節を持つ二音節語が sesquisyllabic words として借用語されるという例も観察される。このとき、借用元の語が複合語である場合、その借用元複合語の語構成は不明瞭になるといえる。例えば、次表のような例がある。表の例ではシャン語 class term の paa¹ 「魚」や maak² 「実」がジンポー語において二音節語の一部になっている例が見られる。この種の語は、ジンポー語において、ジンポー語の class term をさらに伴って用いられることもある (例: nǎ 「魚」 + bəlúk 「鰻」 > 「鰻」)。

表 14 : 借用語の ‘sesquisyllabization’

ビルマ語形式	ジンポー語形式
s ^h é + lei? 「煙草」 (lit. 煙草 + 卷く)	səlík
シャン語形式	ジンポー語形式
paa ¹ +luk ⁴ 「鰻」 (lit. 魚+穴)	bəlúk
paa ¹ +law ¹ 「魚醬」 (lit. 魚+?)	bənàw
maak ² +ʔun ¹ 「ココナツ」 (lit. 実+ココナツ)	məʔún
maak ² +kɔ ³ 「梨」 (lit. 実+?)	məgo
maak ² +kɔk ² 「林檎」 (lit. 実+?)	məkók
maak ² +laaŋ ⁴ 「ジャックフルーツ」 (lit. 実+?)	məlaŋ
p ^h aa ³ +tset ⁵ 「タオル」 (lit. 布+拭く)	phəjət
p ^h ak ⁴ lo ⁴ 「ニンニク」	phəro

3.4.3 ‘Prenasalized words’

第一音節に成節鼻音を持つ二音節語を ‘prenasalized words’ と呼ぶ。

表 15 : ジンポー語における ‘prenasalized words’

名詞	nbuŋ 「風」	ntsin 「水」	ngu 「米」	nmày 「尾」	nlùŋ 「石」	nsén 「声」
動詞	nnan 「新しい」					

この種の成節鼻音は丁寧に発音された場合、声調を持つように発音されることがあるが、しばしば非強勢で発音されその場合は声調が曖昧になる。成節鼻音のピッチが語の弁別に用いられることはないため、本稿では、音韻的には成節鼻音は声調を持たないものと考えられる。成節鼻音は 1) 二音節語の第一音節にのみ出現する 2) 単語末には現れない 3) しばしば非強勢で発音される 4) 声調を持たない、などの点で先述の副音節と類似性を見せる。さらに、次表のように ‘full’ な第一音節を持つ二音節語が弱化して prenasalized words になることがあるが、この点でも副音節と類似している。副音節の表 (表 11) を見ると *nə, *ŋə のような形式が欠けており、成節鼻音はこの穴を埋めるため、成節鼻音は音韻論的には nə または ŋə のような副音節として解釈することができる可能性があるといえる。

表 16 : ‘Prenasalized words’ への弱化

nìŋmày > nmày 「尾」	nìŋsén > nsén 「声」	nìŋgùn > ngùn 「力」
nìŋthu > nthu 「刀」	nìŋnan > nnan 「新しい」	nùmphû > nphû 「埃」

3.4.4 ‘Disyllabic words’

本稿では副音節または成節鼻音ではない ‘full’ な第一音節を持つ二音節語を ‘disyllabic words’ と呼ぶ。この種の語の大部分は第一音節の形式が限定的である点で特徴的である。

表 17 : ジンポー語における ‘disyllabic words’

gùm	gùmgay 「老婆」	gùmphrò 「銀」	gùmrà 「馬」	gùmsà 「封建」
	gùmlàw 「抗する」	gùmlót 「跳ねる」	gùmphòn 「纏める」	gùmrón 「誇る」
gìn	gìnrà 「場所」	gìnthón 「暑季」	gìnwan 「地区」	gìnday 「茎」
	gìnlút 「陥没する」	gìnkhá? 「区別する」	gìnsá 「老いた」	gìnsúp 「遊ぶ」
šìŋ	šìŋma 「背中」	šìŋlét 「舌」	šìŋgàn 「外」	šìŋná 「棒」
	šìŋjòn 「競う」	šìŋtót 「跳ぶ」	šìŋgrúp 「囲む」	šìŋgà 「遮る」
sum	sumpi 「笛」	sumri 「ロープ」	sùmlla 「図」	sùmdu 「金槌」
	sùmru 「考慮する」	sùmli 「飾る」	sùmró? 「武装する」	súmsáy 「笑う」

この種の語彙は第一音節の形式が同一であるにも関わらず、意味的共通性を有していない。そのため、この種の第一音節に特定の意味を認めることは困難である。また、これらの語彙は通常、分析することのできない単一の形態素である。例えば、gùmrà「馬」を gùmrà、gùmsà「封建」を gùm-sà のように分析することはできない。ただし、一部の例では第二音節目に意味を認めることも可能である。例えば、gùmgay「老婆」(cf. dīngay「老婆」, *gay), gùmphrò「銀」(cf. phrò「白い」) のような例は第二音節に意味が認められる。ただし、この種の例も通常、話者には分析できない単一の語として認識されている。

ジンポー語の disyllabic words の大部分は上述の第一音節を持つ語が占めている。この種の第一音節を持たない disyllabic words は少数である。本稿では、仮にこの種の第一音節を ‘general preformative’ と呼ぶ。

general preformative は、先述の副音節と同様、その形式が限定的であり、また、頻度にも偏りが認められる。Hanson (1906) 収録の全語彙を分析した結果、general preformative は次表のような形式にまとめられることが判明した (表中括弧内の数字は収録語彙数、*はその形式が存在しないことを示す)。

表 18 : ジンポー語における ‘general preformative’ (Hanson 1906)

	-m		-n		-ŋ	
	-i-	-u-	-i-	-u-	-i-	-u-
p-	*	*	pin- (2)	*	*	puŋ- (2)
ph-	*	*	*	*	*	phuŋ- (3)
b-	*	*	*	*	*	buŋ- (32)
t-	*	*	*	*	tiŋ- (24)	*
th-	*	*	*	*	thiŋ- (69)	*
d-	*	dum- (40)	*	*	diŋ- (136)	*
k-	*	kum- (31)	kin- (20)	*	*	kuŋ- (13)
kh-	*	khum- (2)	khin- (39)	*	khin- (3)	khun- (9)
g-	*	gum- (98)	gin- (70)	*	gin- (8)	gun- (22)
c-	*	*	*	*	ciŋ- (44)	*
j-	*	*	*	*	jiŋ- (21)	*
š-	*	*	*	*	šin- (119)	*
ts-	*	*	tsin- (9)	*	*	*
s-	*	sum- (82)	sin- (19)	*	siŋ- (34)	*
z-	*	zum- (1)	zin- (2)	zun- (2)	ziŋ- (10)	*
m-	*	*	min- (1)	*	*	*
n-	*	num- (65)	*	*	niŋ- (64)	*
w-	*	*	*	wun- (39)	*	*

これらの形式は次のように一般化することが許される。general preformative の大部分は 1) 閉音節である、2) 鼻音末子音を持つ、3) 狭母音を持つ、4) 子音結合を持たない。さらに、5) 末子音 -m を持つ音節の主母音は u である、6) 末子音 -n を持つ音節の主母音は i である、7) 末子音 -ŋ を持つ音節の主母音は頭子音が歯茎音であるとき i であり、それ以外では u である (表の形式のうち網掛けの形式は以上の一般化に反する形式である。反例は wun- を除いて語彙数が少ないといえる)。また、表では声調を示していないが general preformative の多くは 8) 低下降調を持つ。なお、表を見れば分かるように、子音 ʔ, h, ŋ, l, r, y を頭子音に持つ general preformative は存在しないといえる。

次表に general preformative を持つ語の他の例も掲げておく。

表 19 : ‘general preformative’ を持つ語

dùm	dùmsu 「牛」	dùmsa 「霊能者」	dùmsí 「瓶の口」	dùmbrì 「散らばる」
nùm	nùmriʔ 「露」	nùmgo 「屋根」	nùmthèt 「指示する」	nùmjùt 「突く」
khin	khìngàw 「岸」	khínrû 「田螺」	khíntûm 「抱く」	khyìndiŋ 「妨げる」
sìn	sìnpHRÓʔ 「東」	sìnnáʔ 「西」	sìn.yú 「ワイヤー」	sìnlí 「遺産」
dìŋ	dìŋduŋ 「北」	dìŋdàʔ 「南」	dìŋkhu 「世帯」	dìŋla 「老人」
nìŋ	nìŋbo 「指導者」	nìŋmày 「尾」	nìŋthóy 「光」	nìŋnan 「新しい」

3.4.5 語構造 : まとめ

上述した語構造の各例を音節構造も含め挙げると次のようになる。

表 20 : 語構造 : まとめ

Monosyllabic words: C(C)V(C)		Prenasalized words: N-C(C)V(C)	
CV	bá 「疲れた」	NCV	ngu 「米」
CVC	bàn 「休む」	NCVC	nbuŋ 「風」
CCV	brá 「広がる」	NCCV	npyé 「鞆」
CCVC	bràŋ 「長男」	NCCVC	nkruŋ 「刀尖」
Sesquisyllabic words: Cə-C(C)V(C)		Disyllabic words: CV(C)-C(C)V(C)	
CəCV	ləpu 「蛇」	CVCCV	gùmrà 「馬」
CəCVC	ləpay 「左手」	CVCCVC	gùmgay 「老婆」
CəCCV	ləkhrá 「右手」	CVCCC <small>(少)</small>	gùmphrò 「銀」
CəCCVC	ləpran 「間」	CVCCC <small>(少)</small>	šìŋgrùp 「囲む」

以上の 4 タイプの語構造の基礎語彙全体に占める割合を割り出すための予備的調査として、筆者は服部編 (1967) に基づく 681 語 (名詞と動詞のみ。名詞 331 語; 動詞 350 語) を分析した。その結果、以下の結果が得られた。

表 21：基礎語彙に占める語構造の割合

	1 音節語	2 音節語		
	Monosyllabic	Prenasalized	Disyllabic	Sesquisyllabic
語彙数 (割合)	345 語 (50.7%)	336 語 (49.3%)		
		31 語 (4.6%)	57 語 (8.4%)	248 語 (36.4%)
2 音節語に占める割合	—	9.2%	17.0%	73.8%
非 sesqui. 対 sesqui.		433 語 (63.6%)		248 語 (36.4%)
名詞 (名詞中の割合)	118 語 (35.6%)	30 語 (9.1%)	48 語 (14.5%)	135 語 (40.8%)
動詞 (動詞中の割合)	227 語 (64.9%)	1 語 (0.3%)	9 語 (2.6%)	113 語 (32.3%)

4 語類

本稿では、語類を次の 3 つの基準を用いて認定する: a) 単独で文を形成することができる、b) 否定辞を付加することができる、c) 動詞の項になりうる: 名詞 [+a, -b, +c]; 動詞 [-a, +b, ±c]; 副詞 [+a, -b, -c]; 助詞 [-a, -b, -c]。このうち助詞は相互に異なる特徴を持つものを含んでおり、8 つのサブタイプに分類される: 類別詞、名詞助詞、格標識、TAM 標識、助動詞、副助詞、接続助詞、文末助詞。なお、以上の 4 つの語類に加えて間投詞も認められる。

5 名詞句

最大の名詞句の内部構造は以下のように示すことができる。ただし、以下のカテゴリをすべて含む名詞句が現れることはほとんどない。

DEM-NOUN-V_{adj}-DEM-PL-[CLF-NUM]-NOMINAL PARTICLE

図 2: 名詞句の構造

5.1 指示詞

指示詞は近/中/遠の対立によって構成される。また、遠称は高/中/低の対立をも持つ。

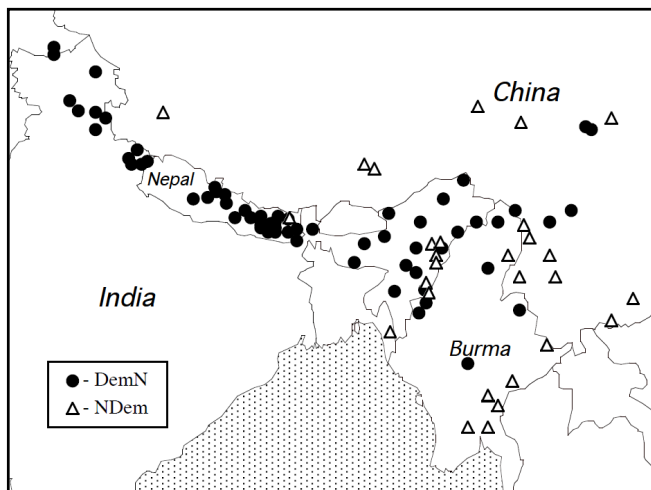
表 22：指示詞

	近称	中称	遠称
中	nday 「この、これ」	day 「その、それ」	wó (or wórà) 「あの、あれ」
高			thó (or thórà) 「(上の) あの、あれ」
低			lé (or lérà) 「(下の) あの、あれ」

指示詞は主要部名詞の前後どちらにも現れうる: nday mà, mà nday 「この子供」。(なお、10 節のテキストの例はすべて主要部名詞の前に指示詞が置かれるパターンを取っているが、同

一話者による別のテキストでは主要部名詞に後続する例も多数見られた)。指示詞の位置による意味的差異は不明である。なお、口語では指示詞が主要部名詞を取り囲む形で 2 つ現れる例も見られる: *nday mà nday* 「この子供」。この種の例はおそらく [*nday mà*] *nday* または *nday* [*mà nday*] のような構造を持ち、指示詞+名詞と指示詞の並列構造を持つものと思われる。照応用法には *day* 「その、それ」または *nday* 「この、これ」が用いられ、遠称は用いられない。

以上のような指示詞の位置に見られる二面性はジンポー語の分布地域と無関係ではないと思われる。すなわち、この言語が分布する西側には DEM-N のパターンを示すインド圏 (Indosphere) の諸言語が分布し、一方、東・南東には N-DEM のパターンを示す東南アジア大陸部諸語が分布しているのである (右の地図も参照。なお、Dryer (2008) において、ジンポー語は DEM-N パタンのみを示す言語として分類されており、この地図では ● で示されているのであるが、これは誤りである)。



地図 2: チベット・ビルマ諸語における指示詞と名詞の順序 (Dryer 2008)

5.2 数詞

数詞は 10 進法を用いる。

表 23 : 数詞

0	—	10	ši	20	khun
1	ləŋây	11	ši+ləŋây	21	khun+ləŋây
2	ləkhôŋ	12	ši+ləkhôŋ	22	khun+ləkhôŋ
3	məsum	13	ši+məsum	23	khun+məsum
4	məli	14	ši+məli	24	khun+məli
5	məŋa	15	ši+məŋa	25	khun+məŋa
6	krúʔ	16	ši+krúʔ	26	khun+krúʔ
7	sənìt	17	ši+sənìt	27	khun+sənìt
8	mətsát	18	ši+mətsát	28	khun+mətsát
9	jəkhù	19	ši+jəkhù	29	khun+jəkhù

10 以上の数はそれぞれを組み合わせで作られるが、「30」は *sùm+ši* のように第一音節が脱落する (**məsum+ši*)。また「20」は *khun* という特殊な形式を用いる (**ləkhôŋ+ši*)。これは

手足の指の数の合計が 20 本であることと無関係ではないであろう。100 以上は *lɔtsa* 「100」, *lɔkhôŋ+tsa* 「200」, *məsəm+tsa* 「300」のように言う。注意を要するのは十と百の桁数が基数の後に置かれるのに対し、千以上の桁数が基数の前に置かれる点である (次表を参照)。なお、*gədè* 「いくつ、いくら」の分布は数詞と同一であるため、この語は数詞の一種であると考えられる。

表 24 : 桁数の分布

‘50’	<i>məŋa+ši</i>	<i>*ši+məŋa</i>	「何十」	<i>gədè+ši</i>	<i>*ši+gədè</i>
‘500’	<i>məŋa+tsa</i>	<i>*tsa+məŋa</i>	「何百」	<i>gədè+tsa</i>	<i>*tsa+gədè</i>
‘5,000’	<i>*məŋa+khiŋ</i>	<i>khiŋ+məŋa</i>	「何千」	<i>*gədè+khiŋ</i>	<i>khiŋ+gədè</i>
‘50,000’	<i>*məŋa+mùn</i>	<i>mùn+məŋa</i>	「何万」	<i>*gədè+mùn</i>	<i>mùn+gədè</i>
‘500,000’	<i>*məŋa+sèn</i>	<i>sèn+məŋa</i>	「何十万」	<i>*gədè+sèn</i>	<i>sèn+gədè</i>
‘5,000,000’	<i>*məŋa+wàn</i>	<i>wàn+məŋa</i>	「何百万」	<i>*gədè+wàn</i>	<i>wàn+gədè</i>
	<i>~ *məŋa+ši+sèn</i>	<i>~ sèn+məŋa+ši</i>	「何百万」	<i>~ *gədè+ši+sèn</i>	<i>~ sèn+gədè+ši</i>

チベット・ビルマ語派の観点から見るとジンポー語の数詞 *ləŋây* 「1」と *lɔkhôŋ* 「2」はこの言語にのみ見られ、これらの数詞はこの言語における二次的発展であることが分かる。本来の形式 (*mi* 「1」, *ni* 「2」) は一部の複合語にのみ残存している: *bàt+mi* 「一週」, *ni+ní* 「二日」, *ni+phót* 「二朝」, *ni+ná?* 「二夜」, *ni+niŋ* 「二年」. この *mi* 「1」という形式は他にも、*ləŋây* 「1」の後に置かれて不定「ある～」の意味を表すこともある (テキストの例 4)。

また、数に関する注意すべき語として他に *yán* という語がある。この語は「二人」を意味するが、この語が特殊であるのはふたつの名詞を接続する働きをも有する点である。

- (1) *gənù=thè? gəwà yán*
 母=COM 父 二人
 「母と父二人」
- (2) *gənù yán gəwà*
 母 二人 父
 「母と父二人」

5.3 類別詞

類別詞の数は少ない。類別詞の多くは借用語である: *məray* 「人」, *bùk* 「本」 (< 英語), *joy* 「秤」 (< シャン語)。名詞句における類別詞の順序は主要部名詞—類別詞—数詞の順である。数詞は類別詞を介さず、直接的に名詞を修飾することも多いが、類別詞が用いられる場合と用いられない場合との意味的差異は明らかではない。

(3) məšà mərəy+məsum
人 CLF+3
「三人の人」

(4) məšà məsum
人 3
「三人の人」

また、類別詞の独立性は高く、主要部名詞を伴わずに用いられることもある。類別詞 mərəy は単独では用いることができないが、この形式に指示詞を付加することも可能であり、名詞的であるといえる。

(5) mərəy+məsum
CLF+3
「三人の人」

(6) mərəy nday
CLF この
「この人」

measure words の中には上記の類別詞とは統語的な振る舞いが異なるものが存在する。例えば、məsum+niŋ 「三年」, məsum+ləŋ 「三回」のような例である。これらは、1) 主要部名詞を取らない 2) numeral-measure words の順を取る。したがって、本稿ではこれらの形式は類別詞ではなく複合語の要素であると考え (cf. šəniŋ 「年」, kələŋ 「一回」)。

テキストには (7) のような例が見られ、この例では表面上、類別詞と数詞が副助詞により分断されている。このような例の構造をどのように分析できるかは現時点では不明である。

(7) jùm joy=mùŋ sùmši šá=na
塩 CLF=も 30 食べる=FUT
「塩も 30 秤食べる」

上述の通り名詞句中の類別詞の順序は主要部名詞－類別詞－数詞の順であるが本テキストには類別詞－数詞－主要部名詞の例も現れる。筆者のデータ中この順序が見られるのは本テキストのみである。この例は [mərəy+məsum]+məšà という複合語ではないかと思われる。

(8) mərəy məsum məšà
CLF 3 人
「3 人の人」

5.4 複数標識

名詞句中の PL スロットには =ni のみが入る: la=ni 「男たち」。複数を表す形式には他にも =the があるが、この形式は PL スロットには現れず NOMINAL PARTICLE のスロットに現れるため、これは名詞助詞であると考えられる (以下の表を参照。表中の語彙: mà 「子供」, mərəy 「～人」, məsum 「3」, yòŋ 「全て」)。なお、=ni および =the の意味的差異は現時点では不明である。

表 25 : 複数標識の分布

	=ni	=the
「三人の子供たち」	mà=ni mərəy+məsum	*mà=the mərəy+məsum
「三人の子供たち」	*mà mərəy+məsum=ni	mà mərəy+məsum=the
「三人の子供たち」	mà=ni məsum	*mà=the məsum
「三人の子供たち」	*mà məsum=ni	mà məsum=the
「全ての子供たち」	mà=ni yòŋ	*mà=the yòŋ
「全ての子供たち」	*mà yòŋ=ni	mà yòŋ=the

5.5 名詞助詞

名詞助詞 (NOMINAL PARTICLE) は名詞句の末尾に現れる助詞である。次のような形式がある: =dərám (or rām) 「くらい」, =šəgù 「それぞれ」, =phrà? 「ずつ」, =ján 「余り」, =the ‘PL’。

5.6 ‘Adjectival verbs’

‘adjectival verbs’ (V_{adj}) とは名詞を後ろから修飾する能力を持つ動詞である。ジンポー語における基本的な名詞修飾の方法は関係節標識 (=TAM 標識) =ʔay を用いて名詞を前から修飾する方法である。ところが、いくつかの動詞は統語的に自由に名詞を後置修飾する能力を持つ (例 9, 10 および表 26 を参照)。

本稿ではこの能力を持つ動詞を ‘adjectival verbs’ と呼ぶ。adjectival verbs は 12 語しかなく、これらは 4 つの意味タイプに収束する (表 27 を参照)。これら 4 つの意味タイプは、典型的に閉じたクラスの形容詞を持つ言語の形容詞に見られる意味タイプと同様である点で興味深い (Dixon 1977)。これらの形式には否定辞を前接できるため、本稿の基準ではこれらは動詞のサブタイプとして分類される。

- (9) gəbà=ʔay šəkûm
 大きい=TAM 壁
 「大きい壁」

- (10) šəkûm gəbà
 壁 大きい
 「大きい壁」

表 26 : 状態動詞による名詞修飾

	後置修飾	前置修飾	意味
gəbà 「大きい」	šəkûm gəbà	gəbà=?ay šəkûm	「大きな壁」
nnan 「新しい」	šəkûm nnan	nnan=?ay šəkûm	「新しい壁」
gəjà 「よい」	šəkûm gəjà	gəjà=?ay šəkûm	「よい壁」
caŋ 「黒い」	šəkûm caŋ	caŋ=?ay šəkûm	「黒い壁」
jà? 「硬い」	*šəkûm jà?	jà=?ay šəkûm	「硬い壁」
thàt 「厚い」	*šəkûm thàt	thàt=?ay šəkûm	「厚い壁」
tsò 「高い」	*šəkûm tsò	tsò=?ay šəkûm	「高い壁」
li 「重い」	*šəkûm li	li=?ay šəkûm	「重い壁」
šáy 「違う」	*šəkûm šáy	šáy=?ay šəkûm	「違う壁」

表 27 : ジンポー語における ‘adjectival verbs’

意味	例
‘DIMENSION’	gəbà 「大きい」 gəjì 「小さい」 gəlù 「長い」 gədùn 「短い」
‘AGE’	nnan 「新しい」 dīŋsà 「古い」
‘VALUE’	gəja 「よい」
‘COLOUR’	phrò 「白い」, caŋ 「黒い」, khyeŋ 「赤い」, tsit 「緑の」, mùt 「青い」

なお、jùm 「塩」 + dùy 「甘い」 > 「砂糖」のような例でも動詞が名詞を後置修飾しているのであるが、dùy 「甘い」のような動詞の後置修飾には統語的な自由度がないことから、このような例は複合語であると考えられる (cf. *mùk+dùy lit. 菓子+甘い)。

5.7 人称代名詞

人称代名詞は単数/双数/複数と 1/2/3 人称の対立を成す。

表 28 : 人称代名詞

	SG	DU	PL
1st	ŋay	?án	?ánthe
2nd	naŋ	nán	nánthe
3rd	ši	šán	šánthe

人称代名詞は性の区別および除外・包括の区別を持たない。

- (11) {ŋay/naŋ/ši} {la/num} rê
1SG/2SG/3SG 男/女 COP
「私/あなた/彼女は男/女です」
- (12) ?ánthe naŋ=phé? yu=?ay
1PL 2SG=ACC 見る=TAM
「私たちはあなたを見た」
- (13) ?ánthe ràw sa=gà?
1PL 一緒に 行く=HORT
「私たちは一緒に行きましょう」

5.8 疑問詞

疑問詞には次のような形式がある: pha 「何」, gəday 「誰」, gərə 「どの」, gədè 「いくつ」. gərə 「どの」は格標識を伴って、様々な意味を表すことができる: gərə=kó? 「どこに」, gərə=dè? 「どこへ」 gərə=khu 「どのように」 (cf. =kó? 「に、で」, =dè? 「へ」, =khu 「ように」).

5.9 場所名詞

場所名詞は場所的概念を表す名詞であり、閉じたクラスを成す: ntsa 「上」, npú? 「下」, šoŋ 「前」, phaŋ 「後」, gətà 「中」, šìŋgàn 「外」。

5.10 名詞サブクラスの特徴

以上で見てきた名詞サブクラスの特徴をまとめると次表のようになる。

a) GEN/REL__, b) __ni 'PL', c) CLF__, d) __V_{adj}, e) __CLF+NUM, f) DEM__, g) ±RDP:

表 29 : 名詞サブクラスの特徴

	a)	b)	c)	d)	e)	f)	g)
普通名詞.	yes	yes	no	yes	yes	yes	no/yes
指示詞.	no	yes	yes	no	yes	no	no
人称代名詞.	no	no/yes	no	no	yes	no	no
疑問詞.	no	yes	no	no	no	no	yes
数詞.	no	no	yes	no	no	no	yes
場所名詞.	yes	no	no	no	no	yes	no

6 格標識

名詞句の統語的・意味的役割は主に名詞句に後置される格標識によって示される。

表 30 : 格標識

形式	必須項を標示	必須でない項を標示	現れるレベル	グロス
ʔàʔ		所有者	句, 節	GEN
ná		所有者, 起点	句, 節	GEN
phéʔ	被動者, 受領者	経路	節	ACC
thèʔ		道具, 材料, 随伴者, 様態, 原因, 列举物	節, 句	COM
kóʔ		場所, 着点	節	LOC
thàʔ		場所, 比較の基準	節	LOC
ʔè		場所, 着点	節	LOC
dèʔ		方向, 着点, 場所	節	ALL
kóʔnná		起点	節, 句	ABL
dùhkrà		着点	節	LMT

必須項を標示する格標識は =phéʔ ‘ACC’ のひとつのみである。必須項のうち、S/A は格標示されず、O は =phéʔ で標示されうる。したがって、必須項の格標示パターンは主格・対格型である。A と O が同一の意味範疇に属する名詞句である場合、A と O に曖昧性が生じる。このときに O 側に付加される格助詞が =phéʔ である (14, 15, 16, 17)。したがって、どの名詞句が A でどの名詞句が O かが明らかである場合は、=phéʔ が通常省略される (18)。

- (14) ɲay ši=phéʔ gəyèt=ʔay
 1SG 3SG=ACC 殴る=TAM
 「私は彼を殴った」
- (15) ši ɲay=phéʔ gəyèt=ʔay
 3SG 1SG=ACC 殴る=TAM
 「彼は私を殴った」
- (16) gùy ləʔnyaw=phéʔ gəwá=ʔay
 犬 猫=ACC 噛む=TAM
 「犬が猫を噛んだ」
- (17) ləʔnyaw gùy=phéʔ gəwá=ʔay
 猫 犬=ACC 噛む=TAM
 「猫が犬を噛んだ」
- (18) ɲay šàt šá=ʔay
 1SG 飯 食べる=TAM
 「私はご飯を食べた」

7 動詞複合

動詞複合 (Verbal Complex, VC) の内部構造は以下のように示すことができる。

[_{vc} [V₁+...V_n]-AUX-TAM]

図 3 : 動詞複合の構造

7.1 動詞

本稿では否定辞 *n-* を付加することができる語をすべて動詞であると見なす (negatability): *n-sá* 「食べない」, *n-gəbà* 「大きくない」, **n-məšà* (cf. *məšà* 「人」).

ジンポー語には反義語を持たない語がいくつか存在し、否定辞はこのような反義語の欠如を埋める役割も果たしている: *n-gəja* 「悪い」 (cf. *gəja* 「よい」), *n-lóʔ* 「少ない」 (cf. *lóʔ* 「多い」), *n-ràʔ* 「嫌う」 (cf. *ràʔ* 「好む」).

動詞の引用形式 (citation form) には TAM 標識のうち最も無標である =ʔay ‘ATELIC’ が付加される。動詞は開いたクラスを成し、借用語も比較的自由に動詞として取り入れられる: *sèt=ʔay* 「電話する」 (< ビルマ語 *s^hɛʔ*), *zèn=ʔay* 「切る」 (< 漢語 *jiǎn*), *khájá=ʔay* 「教える」 (< シャン語), *out=ʔay* 「ログアウトする」.

7.2 動詞連続

動詞のスロットには統語的な依存関係を示す標識を伴うことなく複数の動詞が生起しうる (動詞連続, serial verbs)。動詞連続の特徴は次の二点にまとめられる。a) 動詞連続には統語的要素が介在しない b) 主語は動詞間で共有されなければならない。

a) については、例えば、*khàʔ* 「水」 + *phùnyòt* 「泳ぐ」のようなイディオムの表現が動詞連続の V₂ として用いられた場合、*khàʔ* 「水」は V₁ と V₂ の間には現れえず、V₁ の前に置かれなければならない: *khàʔ sa phùnyòt* 「行って泳いだ」 (cf. *sa* 「行く」, **sa khàʔ phùnyòt*)。

b) については、例えば、東南アジア大陸部の SVO 語順を持つ言語にしばしば見られるような、V₁ の主語が V₂ の目的語になるような動詞連続 (switch-function SVCs) は認められない: **gàp si* 「撃ち殺す」 (lit. 撃つ-死ぬ)。この種の意味を表す動詞連続を形成する場合、*gàp sàt* (lit. 撃つ-殺す) のように V₂ を他動詞にして主語を統一するか、もしくは、継起を表す *nná* ‘SEQ’ を用いて *gàp nná si* のように複文の形にして表す必要がある。

動詞連続は並列される動詞間に次のような様々な意味関係が現れる。

1) ‘SEQUENTIAL’ 継起的な事象を表す。他動詞、動作自動詞、状態自動詞をそれぞれ A, Sa, So と表すと、このタイプの動詞連続にありうる組み合わせは Sa+Sa, Sa+A, A+Sa, A+A, So+So のどれかである (**Sa+So*, **So+Sa*, **A+So*, **So+A* の組み合わせは無い)。

表 31 : SEQUENTIAL タイプの動詞連続に可能な組み合わせ

	e.g.	gross
Sa + Sa	šàŋ yúp 「入って寝る」	(lit. 入る-寝る)
Sa + A	sa šá 「行って食べる」	(lit. 行く-食べる)
A + Sa	gəšún phròŋ 「奪って逃げる」	(lit. 奪う-逃げる)
A + A	gəlo dùt 「作って売る」	(lit. 作る-売る)
So + So	thèn khràt 「壊れて落ちる」	(lit. 壊れる-落ちる)

2) ‘DESCRIPTIVE’ このタイプの動詞連続では V₁ が V₂ を副詞のように修飾する。この種の V₁ には意味変化が起きたものも観察される。

表 32 : DESCRIPTIVE タイプの動詞連続の例

意味変化	e.g.	gross
	gəthè šəga 「ささやいて話す」	(lit. ささやく-話す)
	ləʔnyàn khom 「ゆっくり歩く」	(lit. ゆっくりだ-歩く)
	ləwàn tsun 「速く言う」	(lit. 速い-言う)
	mərón šəgá 「叫んで呼ぶ」	(lit. 叫ぶ-呼ぶ)
	šəkòn tsun 「ほめて言う」	(lit. ほめる-言う)
盗む > こっそり	ləgú yúp 「こっそり寝る」	(lit. 盗む-寝る)
協力する > 一緒に	jóm khom 「一緒に歩く」	(lit. 協力する-歩く)
繋げる > 続けて	mətút gəlo 「続けて行う」	(lit. 繋げる-行う)
加える > 加えて	gəthàp tsun 「加えて言う」	(lit. 加える-言う)

3) ‘PURPOSE’ 目的の意味関係を表す。このタイプの V₂ は移動動詞 sa 「行く、来る」のみである。

(19) šá sa=?ay
 食べる 行く=TAM
 「食べに行った」

(20) ka sa=?ay
 踊る 行く=TAM
 「踊りに行った」

4) ‘COMPLEMENTATION’ このタイプの V₂ の数は限られている。

表 33 : COMPLEMENTATION タイプの動詞連続の例

	e.g.	gross
V ₂ が他動詞	šədu gərurum 「料理するのを手伝う」	(lit. 料理する-手伝う)
	ka šərín 「書くのを教える」	(lit. 書く-教える)
	gəlo šəkùt 「作るのを頑張る」	(lit. 作る-頑張る)
	šá rà? 「食べるのを好む」	(lit. 食べる-好む)
	yu šəróŋ 「見るのを好む」	(lit. 見る-好む)
V ₂ が自動詞	lətá? yàk 「選ぶのが難しい」	(lit. 選ぶ-難しい)
	tsú? lòy 「腐りやすい」	(lit. 腐る-簡単だ)
	khom lə?nyàn 「歩くのが遅い」	(lit. 歩く-遅い)
	dùt gəja 「売り上げがよい」	(lit. 売る-良い)
	kháy ló? 「植えることが多い」	(lit. 植える-少ない)
	thí ləgòn 「読むのが退屈だ」	(lit. 読む-退屈だ)

7.3 ‘Versatile verbs’

動詞連続を構成する動詞の中には文法化によって助動詞のような抽象度の高い意味を獲得した動詞が存在する。この種の動詞は単一の統語的位置のみならず、複数の統語的位置に出現する能力を持つ。このような性質を‘versatility’と呼び、この性質を持つ動詞を‘versatile verbs’と呼ぶ (Matisoff 1969, 1991a, Bisang 2006)¹。

例えば、動詞 *ce* は本来、「知る」という意味を持つ動詞であるが、他の動詞とともに用いられた場合、「～できる」や「～する習慣がある」という意味を表すのであるが、この形式は本動詞の前後どちらにも現れることが可能である。この形式は、基本的に、本動詞の前に置かれた場合は「～できる」という能力可能の意味を表し、本動詞の後に置かれた場合は「～する習慣がある」という習慣の意味を表す。

- (21) məjàp ce šá=?ay
唐辛子 ce 食べる=TAM
「唐辛子を食べることができる」

- (22) məjàp šá ce=?ay
唐辛子 食べる ce=TAM
「唐辛子を食べる習慣がある」

versatile verbs は抽象的な意味を持ち、一見すると助動詞であるかのように見える。しか

¹ Matisoff は必ずしもこの意味に限って‘versatile verbs’という用語を用いているわけではないが、Bisang はこの意味に限定して用いている。ジンポー語ではこの用語を Bisang のように限定的な意味で用いるのが便利であるため、本稿では限定的な意味でこの用語を用いる。

しながら、これらの形式には否定辞を付加することができるため、本稿の基準では動詞と見なさなければならない。

- (23) mǝjǎp n-ce šá=?ay
唐辛子 NEG-ce 食べる=TAM
「唐辛子を食えることができない」
- (24) mǝjǎp šá n-ce=?ay
唐辛子 食べる NEG-ce=TAM
「唐辛子を食える習慣がない」

次表に versatile verbs とその例をまとめて掲げておく (例中の šá は「食える」という意味を表す動詞である)。

表 34 : ジンポー語における ‘versatile verbs’

形式	本来の意味	派生的意味	否定	前置用法		後置用法	
ce	知る	できる		ce šá		šá ce	
			n-	n-ce šá	*ce n-šá	šá n-ce	n-šá ce
lù	得る	できる		lù šá		šá lù	
			n-	n-lù šá	*lù n-šá	šá n-lù	n-šá lù
may	よい	できる		may šá		šá may	
			n-	n-may šá	*may n-šá	šá n-may	n-šá may
daŋ	勝つ	できる		daŋ šá		šá daŋ	
			n-	n-daŋ šá	*daŋ n-šá	šá n-daŋ	n-šá daŋ
kam	意志がある	つもりだ		kam šá		šá kam	
			n-	n-kam šá	*kam n-šá	šá n-kam	n-šá kam
gúy	勇気がある	勇気がある		gúy šá		šá gúy	
			n-	n-gúy šá	*gúy n-šá	šá n-gúy	n-šá gúy
mà?	なくなる	全て		mà? šá		šá mà?	
			n-	n-mà? šá	*mà? n-šá	šá n-mà?	n-šá mà?

本動詞と versatile verbs から成る動詞連続における否定辞の付加位置に関しては、論理的に4つの可能性があるが、上表を見れば判明する通り、versatile verbs—否定辞—本動詞という順序は容認されない。この事実から「否定辞は versatile verbs よりも左側になければならない」という一般化を導き出すことが許される。

versatile verbs を動詞と見なす分析を支持する証拠は他にもある。助動詞が動詞連続の間に現れることができないのに対して、versatile verbs は動詞連続に介在することができる

いう事実である。つまり、動詞連続の間には助動詞などの統語的要素は介在しないが、「動詞」ならば介在してよいのである。

- (25) šàt sa may šá=?ay
 飯 行く may 食べる=TAM
 「ご飯を行って食べてよい」

7.4 助動詞

助動詞は動詞に後接され、ヴォイス性、アスペクト的意味、モダリティ、エヴィデンシヤリティ、甚だしさなどの意味を表す。

表 35 : 助動詞

‘VOICE’	‘ASPECTUAL’	‘MODALITY’	‘EXTENTIVE’
=ya ‘BEN’	=ŋà 「ている」	=na ‘FUT’	=káv 「徹底的に」
=šəŋún ‘CAUS’	=ši 「まだ」	=sám 「ようだ」	=lá? 「とても」
=lóm ‘APPLICATIVE’	=màt 「てしまう」	=giŋ 「すべきだ」	=dik 「最も」
=khát ‘RECIPROCAL’	=ga 「ことがある」	=məyu 「したい」	

助動詞は動詞複合に複数生起することがあるが、その場合の順序は必ずしも固定的ではない。ただし、生起順序に傾向は見られ、甚だしさのカテゴリは動詞に近い位置に現れ、一方、モダリティのカテゴリは基本的に助動詞の連続の末尾に現れるといえる。なお、一部の助動詞は重複させることができる。この場合「いつも」のような習慣的な意味を表す(テキストの例 8)。

7.5 TAM 標識

TAM 標識は動詞複合の末尾に現れる。すべての動詞複合は TAM 標識を持つ。ただし、例外が 3 つある。1) 新聞の見出し・タイトルでは TAM 標識が現れない(テキストの例 1) 2) 助動詞 =na ‘FUT’ の後部には TAM 標識が現れないことがある(以下で述べる) 3) コピュラ動詞 rē は TAM 標識を取らない(8.3 節)。これら例外を除き、基本的に動詞複合は TAM 標識を持たなければならないといえる。

TAM 標識はアスペクトおよびムードを表す。ジンポー語は文法カテゴリとしてのテンスを持たず、アスペクト・ムード卓立型言語であるといえる。平叙文のアスペクトは =?ay/=say ‘ATELIC/TELIC’ の二項対立を成す。=?ay は最も無標な TAM 標識であり、動詞の引用形(citation form) には =?ay が付加される。一方、=say は開始点であれ終結点であれ、事態・状況が新局面に変化したこと・変化しつつあることを今のこととして述べる場合に用いら

れる: kóʔsi=say 「もう空腹だ」, šá=say 「もう食べ終わった」, wà=say=yô 「もう帰るよ」, yúp=say=yô 「もう寝るよ」 (cf. yô ‘よ’)。その他の事象はすべて =ʔay によって表される。

典型的に、=ʔay は状態動詞に付加される場合は現在または過去、動作動詞に付加される場合は過去の事態を表す: gəja=ʔay 「元気だ」, khyeŋ=ʔay 「赤い」, khom=ʔay 「歩いた」, gəyèt=ʔay 「殴った」。

なお、現在の動作は助動詞 =ŋà ‘CONT’、未来の動作・状態は助動詞 =na ‘FUT’ を用いて表す: šá=ŋà=ʔay 「食べている」, šá=na 「行くつもりだ」。いまの例のように助動詞 =na ‘FUT’ を取る動詞には例外的に TAM 標識が現れないことが多い。このため =na ‘FUT’ も TAM 標識の一種と見なせる可能性がある。しかし、=na は TAM 標識ではない。なぜならば、=na の後に TAM 標識が現れうるからである: wà=na=say 「もう帰ります」 (cf. wà 「帰る」)。

ムードは DECLARATIVE/IMPERATIVE/HORTATIVE/OPTATIVE/INTERROGATIVE/EXCLAMATIVE の 6 項対立を成す (表 36 を参照)。平叙文、疑問文、感嘆文には主語の人称制限が見られないが、その他の動詞文には主語の人称制限が見られる。すなわち、命令文の主語は 2 人称、勧誘文の主語は 1・2 人称、希求文の主語は 2 人称または 3 人称である。また、平叙文、疑問文、感嘆文の述語動詞としては意志動詞・無意志動詞ともに現れるのに対して、命令文および勧誘文の述語動詞は意志動詞であり、希求文の述語動詞は無意志動詞でなければならない。さらに、平叙文、疑問文、感嘆文には過去を表す要素が現れうるが、命令文、勧誘文、希求文には現れない。このようにジンポー語の動詞文は大きくふたつの類型に分類することができる。暫定的に本稿では、上述のようなある種の制限を持つ命令文、勧誘文、祈願文を行為的タイプの文と呼び、この種の制限を持たない平叙文および疑問文を認識的タイプの文と呼ぶ。なお、感嘆文はこのどちらにも属さない特殊なタイプであると考えておく。

表 36 : ムード

TAM 標識	代表的な形式	e.g.
DECL	=ʔay	šá=ʔay 「食べた」
IMP	=ʔùʔ	šá=ʔùʔ 「食べろ」
HORT	=gàʔ	šá=gàʔ 「食べよう」
OPT	=ʔùʔgàʔ	pyo=ʔùʔgàʔ 「楽しくあれ」
INT	=nnî	šá=nnî 「食べますか？」
EXCL	=ʔàʔkha	šá=ʔàʔkha 「食べたのか!？」

8 その他の範疇

テキストを理解するうえで必要な範疇のうち、上述していない範疇についてここで若干触れておく。

8.1 副助詞

副助詞 (focal particles) には =gò ‘TOP’, =šà 「だけ」, =cú 「だけ」, =mùŋ 「も」, =má 「も」, =pi 「さえ」などが認められる。副助詞は名詞句、動詞、副詞、節の後に置かれる。名詞句に付加される場合、副助詞は必ず格標識の後に置かれなければならない (テキストの例 10).

8.2 文末助詞

文末助詞 (sentence-final particles, SFP) には yô 「よ、ね」, lo 「よ、ね」, dà? 「そうだ」, ŋa 「だって」, nthén 「かしら」, kún 「かしら」, ?i 「ね、か」, ráy 「か」, tâ 「か」, mà 「か」, lò 「か」などがある。文末助詞は文の末尾に置かれる。疑問文は TAM 標識を用いて形成することも可能であるが (7.5 節)、特に口語では疑問文は文末助詞を用いて形成されることが多い。疑問を表す文末助詞の数は多くその意味的差異の詳細は不明であるが、?i 「ね、か」, ráy 「か」が一般的であり、mà 「か」はややぞんざいである。文末助詞は時に数珠つなぎに複数個続けて用いられ、最大で3つ連続して現れることがある。

(26) gərə=kó? ŋà=?ay=ráy
どこ=LOC いる=TAM=SFP.Q
「どこにいますか」

(27) gərə=kó? ŋà=?ay=ráy=kún=?i
どこ=LOC いる=TAM=SFP.Q=SFP.Q=SFP.Q
「どこにいますか」

8.3 コピュラ

コピュラは rê, ré, ráy の3種が認められる。3種のうち最も一般的なコピュラは rê である。コピュラは否定辞 n- を付加することができるため、語類としては動詞である: mà rê 「子供である」, mà n-rê 「子供ではない」 (cf. mà 「子供」). コピュラとその前に現れる名詞句の間には副詞を介在させることができるため、コピュラの前の名詞句は独立性を有しており、この名詞句はコピュラ補語 (copula complement) であると考えられる: mà nó? rê 「まだ子供です」 (cf. nó? 「まだ」). 以上より、コピュラ節はコピュラ主語とコピュラ補語という必須項を2つ取る節であるといえる。上例の通り、例外的にコピュラ rê の後には TAM 標識が現れない。また、rê は助動詞を取ることもできない。rê を含む動詞複合は rê のみから成るといえる。コピュラが TAM 標識や助動詞を取る場合にはコピュラ ráy が用いられる: mà ráy=sám=?ay 「子供のようだ」, *mà rê=sám (cf. =sám 「ようだ」). なお、コピュラ ré に関しては不明な点が多いため、ここでは触れないでおく。

9 複文

9.1 副詞節

副詞節は接続助詞 (subordinators) を付加して構成される。接続助詞には二種ある。1) 動詞に付くタイプ 2) 動詞複合に付くタイプ。動詞に直接的に付加される接続助詞には =yàŋ 「ならば」, =jaŋ 「とき」, =nná 'SEQ', =khrà 「まで」, mətʉ 'PURP', tíʔmùŋ (or tím) 「だが」 などがある: šá=yàŋ 「食べるならば」. 一方、動詞複合に付加される接続助詞には =məjò 「ので」, =šəlóy 「とき」 などがある: šá=ʔay=məjò 「食べたので」. また、後者のタイプの接続助詞には格標識と動詞からなるイディオムの形式も見られる: =thèʔ 'COM' + mərən 「同じだ」 > 「するやいなや」 (テキストの例 37).

9.2 名詞節・関係節

名詞節 (29 から 35) および関係節 (36, 38, 39) は平叙文そのままの形と同形である。

- (28) šì šàt šá=ʔay
3SG 飯 食べる=TAM
「彼のご飯を食べた」
- (29) šì šàt šá=ʔay mù=ʔay
3SG 飯 食べる=TAM 見る=TAM
「彼のご飯を食べるのを見た」
- (30) šì šàt šá=ʔay n-ce=ʔay
3SG 飯 食べる=TAM NEG-知る=TAM
「彼のご飯を食べたのを知らない」
- (31) šì šàt šá=ʔay=kóʔ
3SG 飯 食べる=TAM=LOC
「彼のご飯を食べた場所で」
- (32) šì šàt šá=ʔay=dèʔ
3SG 飯 食べる=TAM=ALL
「彼のご飯を食べたところへ」
- (33) šàt šá=ʔay=ni
飯 食べる=TAM=PL
「ご飯を食べた人たち」
- (34) day [šàt šá=ʔay=ni]
この 飯 食べる=TAM=PL
「この[ご飯を食べた人たち]」
- (35) šì šàt šá=ʔay rē
3SG 飯 食べる=TAM COP
「彼のご飯を食べたのだ」

- (36) ši šàt šá=?ay lam
 3SG 飯 食べる=TAM こと
 「彼がご飯を食べたこと」
- (37) ?əphù šàt šá=?ay
 兄 飯 食べる=TAM
 「兄はご飯を食べた」
- (38) ?əphù šá=?ay šàt
 兄 食べる=TAM 飯
 「兄が食べたご飯」
- (39) šàt šá=?ay ?əphù
 飯 食べる=TAM 兄
 「ご飯を食べた兄」

このような文、名詞節、関係節の ‘syncretism’ はチベット・ビルマ語派の言語や東南アジア大陸部諸語でしばしば見られる現象である (Matisoff 1972)。本稿では、ジンポー語の関係節は名詞節+主名詞の並列 (juxtaposition) であると分析する。また、この言語の平叙文の多くは名詞節であると分析することができる可能性があるが、本稿では現象を指摘するにとどめておく。

9.3 引用節

引用節は引用標識を動詞複合に付加して形成される。引用標識には ηú および ηa のふたつがあるが、このふたつの使い分けは現時点では不明である。これらの引用標識は動詞 ηú 「言う、と言う」および ηa 「言う、と言う」より発展した形式であるが、引用標識を動詞と見なさない理由は、引用標識に否定辞 n- を付加することができないためである。

- (40) šá=na ηú=?ay
 食べる=FUT 言う=TAM
 「食べると言った」
- (41) šá=na=ηú n-šə̀dù=?ay
 食べる=FUT NEG-思う=TAM
 「食べると思わなかった」

10 テキスト

以下のテキストは 2011 年 2 月から 3 月にかけて筆者がミャンマー連邦共和国北部カチン州ミッチーナ市に滞在した際に収集した約 30 本の民話テキストのうちのひとつである。このテキストの収集日は 2 月 22 日である。調査協力者はミッチーナ市在住の 70 代男性である。テキストの表記に関しては、一段目は正書法表記、二段目は音韻表記である。なお、テキストの訳は基本的に直訳にしたため、日本語として多少不自然なところもある。

(1) **"Kahpu kanau masum myit hkrum yang, panglai nawng htawk dang"**

gəphù+gənw məsum myit khrúm=yàŋ paŋlay+nón thòk daŋ
 elder.bro+younger.bro three mind meet=if sea+lake remove can
 「兄弟三人協力すれば海のような湖も動かせる」

(2) **Jinghpaw maumwi grai law ai kaw na "kahpu kanau masum myit hkrum yang panglai nawng htawk dang" ngu ai maumwi hpe, moi na ji woi ni, nu wa ni ma grai dan leng ai hku hkai tsun ma ai.**

jìŋphò?+màwmùy grày ló?=?ay=kó?ná gəphù+gənw məsum
 jinghpaw+story very many=TAM=ABL elder.bro+younger.bro three
myit khrúm=yàŋ paŋlay+nón thòk daŋ ŋú=?ay màwmùy=phé?
 mind meet=if sea+lake remove can say=TAM story=ACC
mòy=ná jì+woy=ni nù+wá=ni=má
 long.ago=GEN grandpa+grandma=PL mother+father=PL=also
grày dànléŋ=?ay=khu tsun=mà??ay.
 very open=TAM=like say=TAM.PL

ジンポーの民話がとても多い中から「兄弟三人協力すれば海のような湖も動かせる」という民話を昔の祖父母たち両親たちも広く語っていた。

(3) **"Kahpu kanau masum myit hkrum yang panglai nawng htawk dang" da.**

gəphù+gənw məsum myit khrúm=yàŋ paŋlay+nón thòk daŋ=dà?
 elder.bro+younger.bro three mind meet=if sea+lake remove can=HS
 「兄弟三人協力すれば海のような湖も動かせる」だそうだ。

(4) **Moi kalang mi na aten hta, mare kaba langai mi a makau kaw grai kaba ai hka nawng langai mi nga ai da.**

mòy kəlàn mî=ná ?ətèr=thà? mərə gəbà ləŋây mî=?à? məkaw=kó?
 long.ago once=GEN time=LOC city big one=GEN beside=LOC
grày gəbà=?ay khà?+nón ləŋây mi ŋà=?ay=dà?
 very big=TAM water+lake one be=TAM=HS

昔あるとき、ある大きな町のそばにとっても大きな湖がひとつあったそうだ。

- (5) ***Dai nawng gaw panglai daram kaba ai da.***

day nóŋ=gò paŋlay=dərám gəbà=ʔay=dà?

that lake=TOP sea=about big=TAM=HS

その湖は海ぐらい大きかったそうだ。

- (6) ***Dai nawng kata kaw e, grai n hkru ai baren, grai n kaja ai lapu baren langai mi rawng ai da.***

day nóŋ+gətà=kóʔ=ʔè grày n-khrúʔ=ʔay bərən

that lake+inside=LOC=LOC very NEG-good=TAM dragon

grày n-gəja=ʔay lapu+bərən ləŋây mi roŋʔ=ʔay=dà?

very NEG-good=TAM snake+dragon one be.in=TAM=HS

その湖の中には、とても悪い龍、とても悪い龍が一匹いたそうだ。

- (7) ***Shaloi e, dai makau hkan na dumsu yam nga ni jahkring hkring gang sha ai da.***

šəloy=ʔè day məkaw=kháŋ=ná dùmsu+yam+ŋa=ni

then=LOC that beside=near=GEN cow+enslave+cattle=PL

jəkhriŋ-khriŋ gaŋ šá=ʔay=dà?

often drag eat=TAM=HS

そのとき、その近くの家畜をしばしば湖の中に引き込んで食べたそうだ。

- (8) ***Dai baren wa gang nna dai nawng kaba de garawt mat wa wa re ai da.***

day bərən+wa gaŋ=nná day nóŋ gəbà=dè?

that dragon+man drag=SEQ that lake big=ALL

gəròt=màt=wà-wà ré=ʔay=dà?

drag=COMPL=MOVE-RDP COP=TAM=HS

その龍は引きずり込んでその大きな湖へ引きずり込んでばかりいたそうだ。

- (9) ***Karawt sha ai.***

gəròt šá=ʔay.

drag eat=TAM

引きずり込んで食べた。

- (10) ***Kalang lang masha hpe pyi karawt sha ai da.***

kəlàn-làn məšà=phéʔ=pi gəròt šá=ʔay=dà?

sometimes people=ACC=even drag eat=TAM=HS

ときどき人をさえ引きずり込んで食べたそうだ。

- (11) ***Dai shaloi gaw dai hkan na masha ni gaw grai hkrit ma ai da.***
day šəlóy=gò day khán=ná mǎšà=ni=gò grày khrit=mà??ay=dà?
 that then=TOP that vicinity=GEN people=PL=TOP very fear=TAM.PL=HS
 そのときはその近くの人々はとても恐れたそうだ。
- (12) ***Dai majaw shanhte mare hpe kahtawng hpe htawt kau na myit ma ai da.***
day mǎjò šánthe mǎre=phé? gəthòŋ=phé? thòt=káv=na
 that because 3PL city=ACC village=ACC move=THOROUGHLY=FUT
myit=mà??ay=dà?
 think=TAM.PL=HS
 そこで彼らは村を移住してしまおうと考えたそうだ。
- (13) ***Rai timung, dai kahtawng hpe htawt kau yang, mana maka sutgan ginlut nna htawt na shara mung n nga ai da.***
Ráy tí?mùŋ day gəthòŋ=phé? thòt=káv=yàŋ mǎnà-məkà
 COP but that village=ACC move=THOROUGHLY=if very
sùt+gan ginlút=nná thòt=ná šərə=mùŋ n-ŋà=?ay=dà?
 wealth+wealth waste=SEQ move=FUT place=also NEG-be=TAM=HS
 しかし、その村を移住してしまうとたいそう費用を浪費してしまい、移住する場所もなかったそうだ。
- (14) ***Re majaw, mare masha ni grai myit ru ma ai da.***
rê mǎjò mǎre+mǎšà=ni grày myit rú=?mà??ay=dà?
 COP because city+people=PL very mind be.distressed=TAM.PL=HS
 そのため村人たちはたいそう苦しんだそうだ。
- (15) ***Baren mung hkrit ra, htawt shara mung n lu rai grai myit ru ma ai da.***
bərən=mùŋ khrit=rà thòt+šəra=mùŋ n-lù=ráy
 dragon=also fear=OBRG move+place=also NEG-get=COP
grày myit rú=?mà??ay=dà?
 very mind be.distressed=TAM.PL=HS
 龍も恐れなければならず、移住する場所もなくてたいそう苦しんだそうだ。
- (16) ***Dai shaloi dai kahtawng kaw grai share ai kahpu kanau marai masum nga ai da.***
day šəlóy day gəthòŋ=kó? grày šəre=?ay
 that then that village=LOC very brave=TAM
gəphù+gənaw mərəy+məsum ŋà=?ay=dà?
 elder.bro+younger bro CLF+three be=TAM.PL=HS
 そのときその村にたいそう勇敢な3人の兄弟が住んでいたそうだ。

- (17) *Ndai marai masum hte gaw ndai nawng hpe e htawt kabai kau na, nawng hpe hka htum hkra shagawt kabai kau na nga nna nawng makau de sa wa ma ai da.*

nday məray+məsum=the=gò nday nóŋ=phé? ?è
 this CLF+three=PL=TOP this lake=ACC INTJ
thòt gəbày=káw=na nóŋ=phé? khà? thùm=khrà
 remove throw.away=THOROUGHLY=FUT lake=ACC water be.lost=till
šəgót gəbày=káw=na ŋa=nná nóŋ+məkaw=dè?
 scoop.up throw.away=THOROUGHLY=FUT say=SEQ lake+beside=ACC
sa=wà=mà?ʔay=dà?
 come=MOVE=TAM.PL=HS

この 3 人はこの湖をね、取り去ってしまおう、湖を水がなくなるまで掬ってしまおうと言って湖のそばにやってきたそうだ。

- (18) *Nawng makau de sa wa ai shaloi gaw, kahpu yan gaw hka gawt nga ai da.*

nóŋ+məkaw=dè? sa=wà=ʔay=šəlóy=gò gəphù yán=gò
 lake+beside=ACC come=MOVE=TAM=when=TOP elder.bro two.people=TOP
khà? gòt=ŋà=ʔay=dà?
 water remove=CONT=TAM=HS

湖のそばへ来たとき、兄ふたりは水を取り除いていたそうだ。

- (19) *Hka htawt nga ai.*

khà? thòk=ŋà=ʔay.
 water remove=CONT=TAM

水を取り除いていた。

- (20) *Kanau wa gaw nawng makau kaw lu sha sha shadu nga ai da.*

gənaw+wa=gò nóŋ+məkaw=kó? lù?+šá=šà
 younger.bro+man=TOP lake+beside=LOC drink+eat=only
šədu=ŋà=ʔay=dà?
 cook=CONT=TAM=HS

弟は湖のそばで食べ物をだけ料理していたそうだ。

- (21) *Lu sha na shadu nga ai da.*

lù?+šá=na šədu=ŋà=ʔay=dà?
 drink+eat=FUT cook=CONT=TAM=HS

飲み食いするために料理していたそうだ。

- (22) **Dai shaloi e, kanau wa gaw kahpu yan hpe san ai da.**

day šəlóy=?è gəṇaw+wa=gò gəphù yán=phé? sán=?ay=dà?
that then=LOC younger.bro+man=TOP elder.bro two.people=ACC ask=TAM=HS
そのとき弟は兄ふたりに尋ねたそう。

- (23) **"Dai ni anhte sha na matu n-gu kade shadu na i?", ngu kanau wa san ai da.**

dàyní ?ánthe šá=na=mətu ngu gədè šədu=na=?i=ŋú
today 1PL eat=FUT=PURP rice how.much cook=FUT=SFP.Q=QUOT
gəṇaw+wa sán=?ay=dà?
younger.bro+man ask=TAM=HS

「今日私たちが食べるために米をどれくらい炊きますか」と弟は尋ねたそう。

- (24) **Shaloi kahpu yan gaw, "anhte n-gun grai dat ra ai re majaw n-gu dang sumshi shadu u", ngu ai da.**

šəlóy gəphù yán=gò ?ánthe ngùn grày dāt=rà=?ay ré məjò
then elder.bro two=TOP 1PL power very release=OBRG=TAM COP=because
ngu dàŋ+sùmšī šədu=?ù? ŋú=?ay=dà?
rice CLF+thirty cook=IMP say=TAM=HS

そのとき兄ふたりは、「私たちは力をたくさん出さなければならぬから米を30 箒炊きなさい」と言ったそう。

- (25) **"Aw, rai sai. Dai rai yang gaw, shat mai hta gaw jum kade bang na i?"**

?ò ráy=say. day ráy=yàŋ=gò šāt+may=thà=?gò
INTJ COP=TAM. that COP=if=TOP food+good=LOC=TOP
jùm gədè bàŋ=na=?i.
salt how.much put.in=FUT=SFP.Q

「ああ、分かりました。それでは料理には塩をどれくらい入れますか？」

- (26) **"Joi sumshi bang u", bai ngu ai da.**

joy+sùmšī bàŋ=?ù? báy ŋú=?ay=dà?
CLF+thirty put.in=IMP again say=TAM=HS

「30 秤入れなさい」また言ったそう。

- (27) **Shaloi, "dai rai yang majap gaw kade bang na i?", bai ngu ai da.**

šəlóy day ráy=yàŋ məjáp=gò gədè bàŋ=na=?i báy ŋú=?ay=dà?
then that COP=if chili=TOP how.much put.in=FUT=SFP.Q again say=TAM=HS
そのとき「それなら唐辛子はどれくらい入れますか？」また言ったそう。

(28) **"Majap joi shi bang u", ngu ai da.**

məjəp=mùŋ joy+sùmšī bəŋ=ʔùʔ ŋú=ʔay=dàʔ.

chili=also CLF+thirty put.in=IMP say=TAM=HS

「唐辛子も 30 粒入れなさい」と言ったそうだ。

(29) **Dai ga hpe na jang le hka kata na baren wa gaw, "Aga! marai masum masha n-gu dang sumshi sha na nga.**

day gə=phéʔ na=jaŋ lé khàʔ+gətə=ná bərən+wa=gò

that word=ACC hear=when down.there water+inside=GEN dragon+man=TOP

ʔəgá məray+məsum+məšə ŋu dāŋ+sùmšī šá=na=ŋa.

INTJ CLF+three+people rice CLF+thirty eat=FUT=HS

その言葉を聞いたとき水の中の龍は「うわこの 3 人は米を 30 粒食べるだって！

(30) **Jum joi mung sumshi sha na nga nna, majap joi mung sumshi sha na nga.**

jùm joy=mùŋ sùmšī šá=na ŋa=nná məjəp joy=mùŋ sùmšī šá=na=ŋa.

salt CLF=also thirty eat=FUT say=SEQ chili CLF=also thirty eat=FUT=SFP

塩も 30 粒食べると言って唐辛子も 30 粒食べるだって！

(31) **Rai yang gaw, ndai ni gaw hkrit ram ai masha ni re.**

ráy=yəŋ=gò nday=ni=gò khrit ram=ʔay məšə=ni ré.

COP=if=TOP this=PL=TOP fear enough=TAM people=PL COP

それならばこの人たちは恐れるに足る人たちだ。

(32) **Ya hka htaww tawn sai.**

yáʔ khàʔ thòk=tòn=say.

now water remove=RESL=TAM

いま水を取り除き始めた。

(33) **Loi hkring ndai hka hkyet hkra htaww na masha ni re.**

lòy khriŋ nday khàʔ khyèt=khrà thòk=na məšə=ni ré.

few while this water dry=till remove=FUT people=PL COP

しばらくすればこの水が乾くまで水を取り去ってしまう人たちだ。

(34) **Ndai ram ram lu sha sha ai ni gaw hkrit ra sai nga nna baren wa hpawng mat ai da.**

nday ram-ram lùʔ+šá šá=ʔay=ni=gò khrit=rà=say ŋa nná

this enough-RDP drink+eat eat=TAM=PL=TOP fear=OBRG=TAM say=SEQ

bərən+wa phròŋ=mət=ʔay=dàʔ.

dragon+man run.away=COMPL=TAM=HS

これほど食べ物を食べる人たちは恐れるべき」と言って龍は逃げてしまったそうだ。

- (35) ***Baren wa hprawng mat ai shaloi gaw hka gaw shi chyu chyu hkyet mat wa ai da.***
bərən+wa phròŋ=màt=?ay=šəlóy=gò
 dragon+man run.away=COMPL=TAM=when=TOP
khà?=gò ší=cú-cú khyèt=màt=wà=?ay=dà?
 water=TOP by itself dry=COMPL=MOVE=TAM=HS
 龍が逃げてしまったとき水はひとりでに乾いてしまったそうだ。
- (36) ***Hkyet mat wa nna dai kahtawng kaw e zungri zingrat ai baren wa dai nawng kaw nna hprawng sai.***
khyèt=màt=wà=nná day gəthòŋ=kó?=?è zìŋrì+zìŋrát=?ay bərən+wa
 dry=COMPL=MOVE=SEQ that village=LOC=LOC trouble+COUP=TAM dragon+man
day nóŋ=kó?ná phròŋ=say.
 that lake=ABL run.away=TAM
 乾いてしまってその村で人々を苦しめていた龍はその湖から逃げた。
- (37) ***Dai hka mung baren hprawng ai hte maren hka ma hkyet mat sai da.***
day khà?=mùŋ bərən phròŋ=?ay=thè? mərən
 that water=also dragon run.away=TAM=COM similar
khà?=má khyèt=màt=say=dà?
 water=also dry=COMPL=TAM=HS
 その水も龍が逃げるやいなや水も乾いてしまったそうだ。
- (38) ***Dai majaw dai kahtawng gaw grai ngwi pyaw ai hku nga ai da.***
Day məjò day gəthòŋ=gò grày ñùy+pyo=?ay=khu ñà=?ay=dà?
 that because that village=TOP very calm+happy=TAM=like be=TAM=HS
 そのためにその村はとても穏やかでいたそうだ。
- (39) ***Ndai maumwi hpe la-kap nna "kahpu kanau masum myit hkrum yang panglai nawng htawk dang" ngu ai maumwi rai nga ai law.***
nday màwmùy=phé? lá+káp=nná gəphù+gənwaw məsum
 this story=ACC take+adhere=SEQ elder.bro+younger.bro three
myit khrúm=yàŋ paŋlay+nóŋ thòk daŋ
 mind meet=if sea+lake remove can
ŋú=?ay màwmùy ráy=ñà=?ay=lo.
 say=TAM story COP=CONT=TAM=SFP
 この物語に基づいて「兄弟三人力を合わせれば湖も動かせる」という物語なんだよ。

Abbreviation

ABL	ablative	COUP	couplet	PL	plural
ACC	accusative	GEN	genitive	PURP	purpose
ALL	allative	FUT	future	Q	question
AUX	auxiliary	HS	hearsay	QUOT	quotative
CLF	classifier	IMP	imperative	RDP	reduplication
COM	comitative	INTJ	interjection	SEP	sentence-final particle
COMPL	complete	LOC	locative	SEQ	sequential
CONT	continuous	NEG	negative	TAM	tense-aspect-mood
COP	copula	OBRG	obligatory	TOP	topic

参考文献

- Bradley, David. (1996) Kachin. In Stephen A. Wurm, Peter Mühlhäusler, Darrell T. Tryon ed., *Atlas of languages of intercultural communication in the Pacific, Asia, and the Americas*. Vol.2.1. 749–51. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Bisang, Walter. (2006) Southeast Asia as a linguistic area. In Keith Brown ed., *The Encyclopedia of Language and Linguistics*. 2nd Edition, Vol.11. 587–95. Oxford: Elsevier.
- 戴慶厦・徐悉艱・肖家成・岳相昆編. (1983) 『景漢辭典』昆明: 雲南民族出版社.
- Dixon, R.M.W. (1977) *Where have all the adjectives gone? and other essays in semantics and syntax*. Berlin: Mouton.
- Dryer, Matthew S. (2008) Word order in Tibeto-Burman languages. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*. 31: 1–88.
- Enfield, Nick J. (2001) On genetic and areal linguistics in Mainland South-East Asia: Parallel polyfunctionality of ‘acquire’. In A. Y. Aikhenvald and R. M. W. Dixon ed., *Areal Diffusion and Genetic Inheritance: Problems in Comparative Linguistics*. 255–90. Oxford University Press.
- Hanson, Ola. (1906) *A Dictionary of the Kachin Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- 服部四郎 (編). 『基礎語彙調査票』東京大学言語学研究室.
- Heine, Bernd and T. Kuteva. (2005) *Language Contact and Grammatical Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 倉部慶太. (2010) 「ジンポー (カチン) 語における動詞連続の文法化」大西正幸・稲垣和也 (編) 『地球研言語記述論集』2: 15–37. 京都: 総合地球環境学研究所.
- . (2011) 「ジンポー語文法の概要」京都大学大学院文学研究科修士論文.

- Kurabe, Keita. (2011) Co-compounds in the Jinghpaw or Kachin language of Northern Burma. Circulated at the 17th Himalayan Languages Symposium (Kobe City University of Foreign Studies, Kobe, Japan).
- Matisoff, James A. (1969) Verb concatenation in Lahu: the syntax and semantics of 'simple' juxtaposition. *Acta Linguistica Hafniensia*. 12.1, 69–120. Copenhagen.
- . (1972) Lahu nominalization, relativization, and genitivization. In John Kimball, ed., *Syntax and Semantics*, Volume I, 237–57. Studies in Language Series. Seminar Press, New York.
- . (1973) Tonogenesis in Southeast Asia. In Larry M. Hyman, ed., *Consonant Types and Tone*, 71–95. Southern California Occasional Papers in Linguistics, No. 1. Los Angeles: UCLA.
- . (1978) *Variational Semantics in Tibeto-Burman: The 'Organic' Approach to Linguistic Comparison*. Occasional Papers of the Wolfenden Society on Tibeto-Burman Linguistics, Volume VI. Publication of the Institute for the Study of Human Issues, Philadelphia.
- . (1989) The bulging monosyllable, or the mora the merrier: echo-vowel adverbialization in Lahu. In Jeremy Davidson, ed., *South-East Asian Linguistics: Essays in honour of Eugénie J. A. Henderson*, 163–97. School of Oriental and African Studies. London.
- . (1991a) Areal and universal dimensions of grammaticalization in Lahu. In Elizabeth C. Traugott and B. Heine ed., *Approaches to Grammaticalization*, Vol. II, 383–453. Amsterdam: Benjamins.
- . (1991b) Sino-Tibetan linguistics: present state and future prospects. *Annual Review of Anthropology*. 20:469–504.
- . (1999) Tibeto-Burman tonology in an areal context. In Shigeki KAJI, ed., *Proceedings of the Symposium 'Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena: Tonogenesis, Typology, and Related Topics'*, 3–32. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- . (2003) Southeast Asian languages. In William Frawley and Bernard Comrie, ed., *International Encyclopedia of Linguistics*, 2nd Edition, Vol. IV, 126–30. New York and Oxford: Oxford University Press.
- . (2004) Areal semantics: is there such a thing? In Anju Saxena ed., *Himalayan Languages, Past and Present*, 347–93. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Mazaudon, Martine. (1977) Tibeto-Burman tonogenetics. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*. 3 2:1–123.
- 西田龍雄. (2000) 『巨大言語群 — シナ・チベット語族の展望』 京都: 京都大学学術出版.